

小 論 文

(問 題)

2020年度

〈R02146361〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～5ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 解答用紙の所定欄（1カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
 - (4) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答すること。
 - (5) 解答は横書きとし、楷書で左から右へ書くこと。
 - (6) 題名（タイトル）は記入せず、解答用紙の一行目から本文を書き始めること。
 - (7) 解答用紙は表裏両面を使用する形になっている。表から使用すること。
 - (8) 下書きには問題冊子の余白を利用すること。
- 5 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 この問題冊子は持ち帰ること。

問 次の文章は、2019年度東京大学入学式における上野千鶴子氏の祝辞（4ページ以降の資料参照）に関して、東京大学初の女性教授として活躍した中根千枝氏が語ったものである。現在、わが国では男女共同参画社会の実現を目指すなか、戦後、女性研究者として活躍した中根氏の経験から、わが国の社会の一端を知ることができる。

この中根氏の文章を読んで、わが国における女性を取り巻く社会環境に関して、あなたが強く感じた点を二つ取り上げ、それらを取り上げた理由を述べなさい。さらに、その二点に触れながら、これからの日本社会はどのようなべきか、あなた自身の意見を述べなさい。なお、901字以上1200字以内で述べる。また、改行によって生じる空欄は字数に数えるものとする。

中根さんは2009年の東大大学院入学式の祝辞で「本業としての研究者や確立された組織の管理職についている日本の女性の割合は先進国などと比べて一番低い」と述べた。問題意識は上野さんの祝辞と通底している。

—中根さんの祝辞から10年経っても女性の比率が問題になります。なぜでしょうか。

外国に比べて、日本では要職につく女性の比率が少ない。その原因の一つは、日本の歴史上「女性は学問しなくていい」という思想が強かったことにあります。さかのぼると、紫式部がいた平安朝はよかった。紫式部は勉強熱心で、『史記』など中国の古典を相当読んでいたことが明らかになっています。平安時代が続けば、日本の女性もそんなに悪くなかったと思う。でも、その後、武家社会となり、戦乱が江戸時代の初めまで断続的に続き、女性にとって学問は重視されなかった。海外はそうじゃないの。たとえばインド。階層社会で、上流階級の家では学者を呼んで家で講義をさせる。そこには女の子も当然入っている。フランスなど欧州にも女子に学問をさせる文化がある。だからね、日本で女性が役職につけない一つの理由は、学がないからです。世間のことと学問のこと。その両方で訓練された女性が日本では全体的に出てこないのね。

—進学における男女差について、上野さんは「どうせ女の子だし」と水をかけ、「息子は大学まで、娘は短大まで」でよいと考える親の意識の結果だと語りました。そして、ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイさんの父親が「娘の翼を折らないようにしてきた」と語った話から、多くの娘たちが翼を折られてきたと訴えかけました。

そういう側面は確かにありますよね。家庭環境は大きいでしょうね。私の友達でもとても真面目で優秀だったのに、封建的な家庭に育って、翼を折られてしまった人もいます。ありがたいことに、私の父は「女だから」という意識は全くなく、子どもの私と麻雀をして負けると本気で悔しがるような人でした。「東大に行くなら法学部に行けばいい」と勧められたこともありましたが、「私は東洋史がやりたいの」と言い返したら、それ以上は何も口出しされませんでしたね。翼を折らずに見守ってくれたことに感謝しています。

中根さんは1926年生まれ。津田塾専門学校（現・津田塾大学）卒業後、終戦後の1947年、女性に門戸を開いた東京大学に入学。1958年から東京大学東洋文化研究所講師となり、1970年には東大で女性初の教授に就任。その後も女性初の研究所長、女性初の日本学士院会員と「女性初」を更新し続けてきた。

—学術の場で中根さんが「女性初」を更新し続けられたのはなぜでしょうか。

女性初というのは意識したことはありません。女性第一号なんて、人生の長いプロセスの一点にしか過ぎないでしょう？女性初だと一生榮譽があるかって言えば、実は何もないもの。

戦争が終わってすぐにモンペを脱いで、空色のワンピースに着替えました。東大受験では、周りからは「男の子は頭がいいから、女の子は無理でしょう」と言われましたが、私は女子校にいたから男の子がどれくらい勉強できるか分からなかったの。

私は中央アジアのことを知りたかったから、東洋史学科に入りました。その時の主任教授が私の卒論にとってもいい批評をしてくれたの。「あなたは小さいところを細かく突っ込むよりも、大きく見て、その大きさの中から何かを生み出すことが好きですね」と。

男女の違いなんて言わず、純粹に理論的に指摘してくれたから、とっても気持ちがよくてね。その時に、「女でもできましたね」なんて言われたら、きつとがっかりしていたでしょうね。

中根さんの代表作が『タテ社会の人間関係』（1967年）だ。資格（学歴、地位、職業など）や能力による「ヨコ」のつながりではなく、会社や学校など集団内の年功序列という「タテ」の関係によって規定される日本社会の様相をインドや欧米と比較して鮮やかに描き出した。

—中根さんが東大初の女性教授になった時、新聞は「タテ社会のトップに立つ」と報じました。女性がトップに立つこととタテのシステムはどう関係するのでしょうか？

男女のことでうるさく言う人も、先輩後輩は大事にするでしょう。それがタテのシステムです。後輩が先輩になるっていうことはないし、どんなに意地悪をしても先輩後輩の関係は絶対に変わりません。だから、タテのシステム、序列のある社会は本来、女性にはプラスなんです。女性だって会社でエレベーターで先輩に「お先にどうぞ」とやるでしょう。あれがタテのシステムを守っている強い証拠です。私もタテのシステムに入ったからこそ、教授になれたんだと思います。女性で意地悪するみたいなのは、タテのシステムとは別の話ね。日本は先輩後輩の社会なので、女性だからといって入れないことはないの。

—どんな人にも先輩後輩はある。けれども、力のあるタテのシステムに入れるかどうかでその後が変わってくる。

そうですね。たとえば学校を例にとると、東大のシステムに入れなかったというのは、勉強ができなかったからですね。その理由は、本人の問題だけではなく、さきほど申し上げたように、女性が学問をすることを重視されてこなかった歴史的土壌や家庭環境、翼を折られてきた背景があるからです。

—日本の女性は資格や能力、性別などでつながるヨコの連帯を強めるべきなのでしょうか？

いえ、私自身は東大でも「さつき会」（1961年発会）という女子卒業生の同窓会団体に誘われたこともあったけど、一度も行かなかった。同じ女性だけ集まったってしょうがないと思ったから。

ただ、女性に対する問題は依然として存在しています。昔から日本では年齢の高い女性をあまり尊重しないでしょう。一番いいのは若いきれいな女の子よね。それが問題なんです。銀行とかね、窓口きれいな子が並んでいるでしょう。若くてかわいい女性がいると客がもっと来るっていう考え方があるわけです。でも、お客さんにとって大切なのは時間でしょう。それなら、決定権がある人が窓口にいてほしい。窓口には経験と知識がある人がいたほうが、ずっと能率が上がると思います。そういう理解になっていないのが日本の問題なのね。結局、「かわいい」なんてことを優先させているのは、日本社会は知性を本気になって考えていない証左だわ。

東大の入学式で上野さんは、東大の女性比率は学部生でおよそ20%、大学院修士課程で25%、博士課程では30.7%まで上がり、さらにその先の研究職になると、助教で18.2%、准教授で11.6%、教授で7.8%と役職が上がるごとに女性比率はどんどん低下すると指摘した。企業の幹部構成でも同じように上位になるほど女性比率が下がるケースが指摘されている。

—中根さんは10年前の東大大学院の祝辞で、社会環境によるマイナスは女性の方が大きいと述べていました。結婚や出産など揺れ動く要素が少ない時期に、研究への情熱を続けて持つことが大切であると。

そうなの。祝辞でも言いましたが、女性の方がいろんな“雑音”が入りやすいですからね。だから、女性が社会に出ることについて、日本では制度的に不利なこと、社会の理解が不十分であることがよく指摘されますよね。でも、私がアメリカやイギリスで大学院を担当した経験からみますと、日本の女性は、研究に対する心構えが弱いように感じました。私が接した外国の女性たちには、個人を取り巻く障害に対する強さがありました。日本の女子学生にも不利な条件に対して賢く対応する術を持ち、努力をしてほしいと思います。

—日本の女性にも個人としての強さを持ってほしいと。

私は戦後間もない時代に、象しか交通手段のないインドの奥地に調査に行っただけです。人間社会における未開と文明の意味を社会人類学的に調査するのが目的でした。当時は寝袋などもなかったため、ポーターを雇って、折りたたみの木製のベッドを持って、食料も持参していく。ベッドのない地域では、大木を二つに割って平らな方をベッドにしたこともあったの。

ジャングルで危険なのは「マンイーター」という人間の味を覚えてしまった人食いトラでした。そいつが来たら大変なので、現地の人たちは木の上で見張りをしていて、教えてくれるのね。そんなところに女性が一人で行くというのは、確かに当時の日本としては、珍しいことだったかもしれませんね。多くの人から無理だと言われました。でも、女だからとか男だからとか自分に制限を設けずに、一人で自由に心の赴くままに調査したかったのです。

私は生涯独身でしたが、もし結婚していたとしたら、これだけ研究に没頭はできなかったかもしれないです。だって、何か月も一人でジャングルの奥に行っちゃったりするから。やっぱり相手がいたら、ちょっと気を使うじゃない。

—自由に研究に没頭したいから結婚は考えなかったのですね。

そう簡単にも言えないわよ。いい人がいたら、って思うこともありました。ただ、1952年に東大に助手になった時は、教授会では反対の意見も多かったそうです。「女性は結婚したら、研究をやめちゃう。だから、研究職にしなくてもいいだろう」って。私はたまたまいい相手がいなかったことと、研究に没頭する時期が一致したんだわ。

—国際労働機関（ILO）の報告書によると、2018年に世界で管理職に占める女性の割合は27.1%ですが、日本は12%にとどまり、主要7カ国（G7）で最下位。アラブ諸国と同水準とされています。

それはやっぱり伝統と関係があるわね。例えばインドや中国では、家庭のウチとソトを区別しています。ソトの関係は男性がトップ。でもウチでは、女性の最年長者がトップなのよ。最年長の女性は、男性を含む大家族の中のトップで絶対権限を持つ。だから女性がトップであるということには慣れてるのよ。それは女性が社会に出てトップとして活躍するのに、とても都合がいい。

インドの女の人、若くても早く最長老になりたいと思うの。権限を振るうのがとても楽しみなのね。そういう雰囲気から、マネジメントがうまいわけよ。日本には女性でそういうマネジメントを学んだり、生かしたりする場面がない。日本ではウチ、ソトの区別をせず、「女の子だから」と言われて育っちゃうでしょう。マネジメントは経験がないと駄目なのよ。

—上野さんの祝辞で最も反響があったのは、東大生は頑張れば報われると思ってここまで来たが、頑張っても公正に報われない社会が待っていると語った部分です。そして、「あなたたちの頑張りを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれない人々を助けるために使ってください」とノブレス・オブリージュ（身分の高い人がもつ社会的責務）とも受け取れる内容を話していました。

日本には階層がなく、「連続」の思想です。つまり、自分はある人より持っているが、でも上には自分よりもっと持っている人がいる、という相対的比較の社会。だから、上層の者にはその特権を持たない人のために一定の義務がある、という思想、ノブレス・オブリージュが根づいていない。「もてる者」が「もたざる者」へ援助する思想が希薄なのです。

ですが、これからは女性の問題を含めて、自分だけ良ければいいという社会ではなく、もたざる者、あるいは、頑張りたいくても頑張れない人へのまなざしが重要になってくるのではないのでしょうか。

（出典）河合香織・Yahoo!ニュース特集編集部：『『序列のある社会は本来、女性にはプラス』東大初の女性教授・中根千枝氏の助言』（2019年6月17日配信）URL:<https://news.yahoo.co.jp/feature/1354>

なお、作問の都合上、原文の一部を改変した。

※Web公開にあたり、著作権者の要請により出典追記しております。
「Yahoo!ニュース 特集」

【資料】

平成31年度東京大学学部入学式 上野千鶴子氏 祝辞

ご入学おめでとうございます。あなたたちは激烈な競争を勝ち抜いてこの場に来ることができました。

その選抜試験が公正なものであることをあなたたちは疑っておられないと思います。もし不公正であれば、怒りが湧くでしょう。が、しかし、昨年、東京医科大不正入試問題が発覚し、女子学生と浪人生に差別があることが判明しました。文科省が全国81の医科大・医学部の全数調査を実施したところ、女子学生の入りにくさ、すな

わち女子学生の合格率に対する男子学生の合格率は平均1.2倍と出ました。問題の東医大は1.29倍、最高が順天堂大の1.67倍、上位には昭和大、日本大、慶応大などの私学が並んでいます。1.0倍よりも低い、すなわち女子学生の方が入りやすい大学には、地方国立大医学部が並んでいます。ちなみに東京大学理科3類は1.03倍、平均よりは低いですが1.0倍よりは高い、この数字をどう読み解けばよいのでしょうか。統計は大事です、それをもとに考察が成り立つのですから。

女子学生が男子学生より合格しにくいのは、男子受験生の成績の方がよいからでしょうか？全国医学部調査結果を公表した文科省の担当者が、こんなコメントを述べています。「男子優位の学部、学科は他に見当たらず、理工系も文系も女子が優位な場合が多い」。ということは、医学部を除く他学部では、女子の入りにくさは1倍以下であること、医学部が1倍を越えていることには、なんらかの説明が要ることを意味します。

事実、各種のデータが、女子受験生の偏差値の方が男子受験生より高いことを証明しています。まず第1に女子学生は浪人を避けるために余裕を持って受験先を決める傾向があります。第2に東京大学入学者の女性比率は長期にわたって「2割の壁」を越えません。今年度に至っては18.1%と前年度を下回りました。統計的には偏差値の正規分布に男女差はありませんから、男子学生以上に優秀な女子学生が東大を受験していることになります。第3に、4年制大学進学率そのものに性別によるギャップがあります。2016年度の学校基本調査によれば4年制大学進学率は男子55.6%、女子48.2%と7ポイントもの差があります。この差は成績の差ではありません。「息子は大学まで、娘は短大まで」でよいと考える親の性差別の結果です。

最近ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイさんが日本を訪れて「女子教育」の必要性を訴えました。それはパキスタンにとっては重要だが、日本には無関係でしょうか。「どうせ女の子だし」「しょせん女の子だから」と水をかけ、足を引っ張ることを、**aspiration**の**cooling down**すなわち意欲の冷却効果と言います。マララさんのお父さんは、「どうやって娘を育てたか」と聞かれて、「娘の翼を折らないようにしてきた」と答えました。そのとおり、多くの娘たちは、子どもなら誰でも持っている翼を折られてきたのです。

(中 略)

これまであなたたちが過ごしてきた学校は、タテマエ平等の社会でした。偏差値競争に男女別はありません。ですが、大学に入る時点ですでに隠れた性差別が始まっています。社会に出れば、もっとあからさまな性差別が横行しています。東京大学もまた、残念ながらその例のひとつです。

学部においておよそ20%の女子学生比率は、大学院になると修士課程で25%、博士課程で30.7%になります。その先、研究職となると、助教の女性比率は18.2%、准教授で11.6%、教授職で7.8%と低下します。これは国会議員の女性比率より低い数字です。女性学部長・研究科長は15人のうち1人、歴代総長には女性はいません。

(中 略)

あなたたちはがんばれば報われる、と思ってここまで来たはずですが、冒頭で不正入試に触れたとおり、がんばってもそれが公正に報われない社会があなたたちを待っています。そしてがんばったら報われるとあなたがたが思えることそのものが、あなたがたの努力の成果ではなく、環境のおかげだったことと忘れないようにしてください。あなたたちが今日「がんばったら報われる」と思えるのは、これまであなたたちの周囲の環境が、あなたたちを励まし、背を押し、手を持って引きあげ、やりとげたことを評価してほめてくれたからこそです。世の中には、がんばっても報われないひと、がんばろうにもがんばれないひと、がんばりすぎて心と体をこわしたひとたちがいます。がんばる前から、「しょせんおまえなんか」「どうせわたしなんて」とがんばる意欲をくじかれるひとたちもいます。

あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとをおとしめるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムはけっして女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のまま尊重されることを求める思想です。

(後 略)

(出典)「平成31年度東京大学学部入学式 上野千鶴子氏の祝辞」

URL:https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html

なお、作問の都合上、原文の一部を改変した。

[以下 余 白]

